



リニューアルにより発展し続けるまち大須

村井 亮治

ビジネス拠点の名古屋駅周辺、ファッション拠点の栄、下町情緒漂う大須、名古屋を代表するこの3エリアは、近年特になほ活発な「都市のリニューアル」が進行中だ。その中でも業務を通して関わりの深い「大須」のリニューアルをみる。



オープン1周年を迎えた301ビル。大須のランドマークとしてすっかり定着した。表紙には再開発以前の街並みを掲載

301ビル誕生から一年

昨年、この紙面で紹介した大須30番第1地区第一種市街地再開発事業「OSU 301ビル（以下、「301ビル」）」は、昨年未だ無事に開業一周年を迎えた。301ビルは名古屋では初の「中華街」として注目され、TV取材やタウン誌等に掲載され多くの集客がみられた。大須商店街は、301ビルが誕生する以前から話題に事欠かないエリアとして各種取材が絶えなかったが、301ビル、中華街の出現によりその位置づけはさらに高まったようだ。

大須商店街でのリニューアル

大須商店街は、これまで世間の景気による影響を受けながらも、地元商店主らの努力により衰退することなく、賑わいのある商店街を維持し続けてきた。

そんな大須商店街でもリニューアルは様々な場面で行われてきた。特に、大須の象徴でもあるアーケードは、301ビルの西に面する「新天地通商店街」で一九九八年に全面的に架け替え工事が行われ、また大須一の賑わいを誇る「万松寺通商店街」でも二、三年に補強改修工事が

された。さらに、万松寺通の南にある「東仁王門通商店街」でも改修工事が行われ、こちらは木目調の仕上げが施され、他の商店街とは異なる雰囲気を出している。



架け替えのために撤去されオープンになった新天地通商店街（平成8年）。こんな開放的な商店街はもう当分はみられないだろう。

その他、大須商店街内の店舗でも老舗店舗の建替えや既存店舗の事業拡大に伴う出店、新たなビジネスチャンスを求める若手経営者らの出店が続いている。一方、商店街から一本入った裏路地でも、古い民家等が拘りの古着やアクセサリーショップへと変わり、若者らの往来がみられる。

さらに、栄から矢場町を通り大須へと通じる大津通りでも、栄エリアでは有名ブランド店舗の出店が相次いでいる中で、大須周辺では、既存店舗の改修により飲食店が多く誕生し、栄とは違った雰囲気

の街並みへと変わりつつある。このようなりニューアルは、商店街アーケードの改修等をきっかけに、今回の301ビルの計画が進むにつれ特に増えてきたように思える。それほど、この301ビルの影響は大きかったようだ。

商店街の抱える不安

ただ、商店街内の店舗のリニューアルの中には、店主が高齢となり後継者難から既存店舗の経営が維持できず、テナント貸しされるケースが少なくない。洗練され華やかで魅力あるデザインの店舗が誕生することは、商店街の雰囲気を高める上ではプラス要因ではあるが、外部からのテナント店舗の経営者や店長と、そこで暮らしながら商売を続けてきた店主らとは、まちへの意識に温度差がある場合もあり、地域連携や良好なコミュニケーションの形成に不安が残る。大須商店街では「大道町人祭り」などの大イベントや数多くの販促活動が実施されているが、新たに大須で商売を始めた経営者らにもまちの取り組みや行事への理解と積極的な協力が求められている。



大須一の賑わいを誇る万松寺通商店街。アーケード改修、301ビル完成、店舗のリニューアル等、話題が尽きない。

301ビルと大須商店街

今回の301ビルは、市街地再開発事業の手法を用いたリニューアルで、従前の店舗が301ビルに再び入店し、ビルができる前と同じ並びで商店街に戻ってきた。店舗は一新したが、店主の顔ぶれはそのまま変わることにはなかった。さらに店主



アーケードの改修工事が進む東仁王門通商店街。今後の集客増加に期待がかかる（平成16年末）。



近年、規模は小さいながらも店舗の新規出店が続く矢場町から大須へと通じる大津通り一帯。

らは、店舗は新しくなっても今までと同じ商売をしていては意味がない」と、新たな商売を研究し301ビルで取り組んでいる。これからの大須商店街には、こうした意識により代々続いたお店を守り続けていこうとする力が必要で、それにより人情味豊かなまちの雰囲気は変わらずに続いていくことだろう。

301ビルは、リニューアルの中でも特殊なケースではあるが、301ビルの誕生が新たな大須の発展のきっかけとなったといわれるようになることを願う。